

# 衝撃のスピーチ

松原泰子

昨年の九月、六十九歳になった。よくここまで来たと思う。

最近、両親のことを頻繁に思い出すのは何故だろう。父と母。私にとって凄惨な存在であった。八年前にも書かずにはいられなくなり、日記帳に父のことを綿々と綴ったものが出て来た。

父の日記帳はどこへ行った

『シューベルト』と、『菩提樹はさざめく』の二冊の本を読んだ。シューベルトが、三十一歳の若さで死の床に着いたとき、最後まで目を通していたのは、歌曲『冬の旅』だという。主人公の絶望の旅を辿ることにより、実存の問題をえぐり出している。

二十七歳のときのシューベルトの日記には、「誰も他人の苦しみを理解しない！ 誰も他人喜びを理解しない！ 人はいつも互いに向かい合っていると信じているが、並んでよそを見ているに過ぎない」と記されている。

かつてシューベルトの映像をテレビで観たことがある。烏打帽のようなものを被っていた。本を読みながら、その時の映像シーンを思い出していたら、懐かしい父の帽子姿と重なった。そうそう、父も良く帽子を被っていたっけ。父について書いてみよう！ と思った。

明治三十一年生まれの父は、八十八歳で亡くなった。十七年も前になる。歌舞伎役者、中村歌右衛門に似ていると、近所の人からよく言われたものだ。

現役時代は、好きな英語を生かし、通訳をやっていた。晩年の父は、いつも着物姿で、二階の陽の当たる、居心地の良さそうな部屋にいた。卓袱台の上には本が数冊置いてあり、文藝春秋はいつも置いてあった。

テレビは討論会を見ていたりした。細川隆元や政治家との対談を一緒に見た記憶もある。

父は芝居を観るのが好きで、よく浅草方面に出掛けていたようだ。当時の浅草は、全盛期で、芝居好きにはたまらなかつただろう。

そんな父も亡くなる一、二年前から、記憶力が徐々に低下してきていた。

私が東京の実家に遊びに行くと、

「どこから来たんですか」と優しい声と、麗しい表情で聞いた。

「横浜から」と答えた。すると、

「ああ、横浜ねえ」

納得してみたようだ。しかしまたソフトな声と優しい眼差しで、同じ質問をしてきた。

この様な状況の中でも、私は思ったものだ。いくつになっても整った顔立ちだなー。大きな切れ長の目、二重瞼がくつきりとしていた。鼻筋が通り、唇だけは、ぼつてりとしていた。まるで京都の舞妓さんのように……。

今、父の記憶をたぐり寄せようとしても、断片的にしか思い出せない。それはどうしてだろう。余りにも年の差があったからか。四十五歳もの開きがあった。

私が中学生の頃、父は父という感じではなく、祖父のような、一種、妙に不思議な感覚がしていた。会う頻度も極端に少なく、心の隔たりは益々大きく、心の中にポツカリと、大きな穴が空いているようだった。しかし、当時は、そのような意識は、感覚的に思っていただけだ。

私は成人したらしたで、自分のことに忙しく、父のことは、ほとんど頭の中を過ることはなかった。

その後も、三人の子育てに夢中だった。そして、一九七八年、三十五歳の時、イギリスとアフリカのザンビア共和国に、五年間転勤になった。その時父は古希になっていた。

一番父にとってかわいい盛りの孫たち、四歳、七歳、十歳も、日本から海外へと引き裂かれてしまった。

当時の海外駐在は、今とは違い、遠い国というイメージであった。ヨーロッパは遙か遠く、ましてやアフリカとなるとほとんどの人がピンとこない。日本人も少なく、郊外に行くとか村の人たちに珍しがられ、ぐるりととり囲まれたこともあった。

そのような時代的背景もあり、会社と個人の間では、日本に安易に帰ることは出来ない、という暗黙の了解があった。

残された両親は、その後、公園のベンチに座り、外の子供たちの遊ぶ姿を、ぼんやりと眺めていたという。姉は後に私に話した。

私にとって父親の存在とは一体、何だったのか。

私が日本に長い間住んでいたら、もっともっと父と会えただろうし、父の一生、父の

人生観、父の得意なことなど、いっぱい聴いてあげられたのに。

そうだ。唯一、強烈に印象に残っていることがある。

それは、私達がザンビアの首都ルサカから帰国した一九八三年の正月のことである。父が亡くなる二年前、八十六歳の時で、私が四十一歳の時であった。

ホームパーティーを始めようとした時のこと。姉が父にお正月の挨拶を言ってもらいましよう、ということになった。

指名された時の父の嬉しそうな顔。待つてました！と言わんばかりに堂々と英語を話始めた。

「アイ・ディクレエア……」とホームパーティーにはふさわしくない、むしろ公共の場で使うような難しい英語のスピーチを始めたのだ。

家族も親戚もびつくりした。まさか！という感じだった。

父はすでに九十年以上前に、英語を修得していたことになる。

新しい記憶は覚えられず、ガツカリするほど忘れ去ってしまうのに、昔、時間をたくさん費やし、猛勉強したものは、記憶として、整理整頓され、古い脳の奥に保存されるものだ、ということ、正に父が証明してくれたようなものである。

それから日課として、日記も書いていたようだ。

父が八十代のころ、日記の束が、押し入れの行李の中に、ぎっしりと入っていたのを見たことがある。

手作りの日記帳は、半紙半分の大きさで、神は茶色のボール紙だった。錐で穴が開けられ、靴紐が通され、硬く結ばれていた。

パラパラッと日記帳を見ると、横書きで、漢字とカタカナ混じりで、書体は最初から最後まで、一文字の乱れもなかった。

私は今、父の書き残した日記帳を読みたい。父の生きた明治、大正、昭和の時代。

父は母はどのような事を考え、何を勉強し、長い人生を送って来たのか。そして二校も大学の大学をどうして卒業したのか。

私はそれらのことを全く知らないのだ。

悩みだつて数えきれないほどあっただろうに。人には決して口が裂けても言えないことがあったのではないか。

結局人は、自分の悩みを自分で解決し、とにかく前に向かって、生き抜いていかなけ

ればならないのだから……。

生まれた時代、生まれた国は違っていても、人は皆、真摯に人生と向き合っていると思う。

あの日記帳を私は今、じっくりと読んでみたい。しかし、父が亡くなった直後、大事な行李が見つからないのだ。確かに押し入れの上段、左に置いてあったのだが……。

でも今さら誰をも責める気にはならないが、ただ一言、残念、心残りである。

かつて明治生まれの父が、通訳として流暢な英語を武器に、輝かしい時代が、時期があった、と確信する。

ある日、実家に姉と手伝いに行った時、父は一度だけ私に、

「泰子ちゃん、英語の発音がうまいね」と、言ってくれたことがある。此の時は、すでに記憶もかなり低下していた晩年であった。

私は父を喜ばせようと、英語で日常会話をしていた。その時だけは最高の笑みになった。

一生懸命に勉強に励み、探究心を追い続け、三つの時代を生き抜いた父。深く係わることはなかったが、行動は父親に類似しているところがあり、改めて親子の繋がりを感じてしまう。

父親に一言、有意義な人生を送っています。あ・り・が・と・う！ と言いたい。

父のペールに包まれた部分は、今は想像し、心の中で思い描き続けるだけだ。